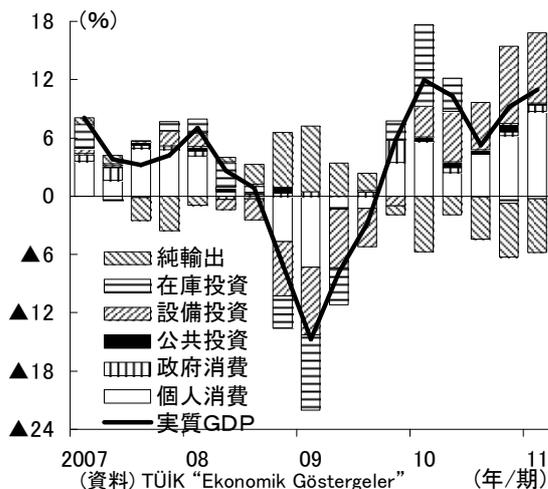


ハイペースで成長するトルコ経済

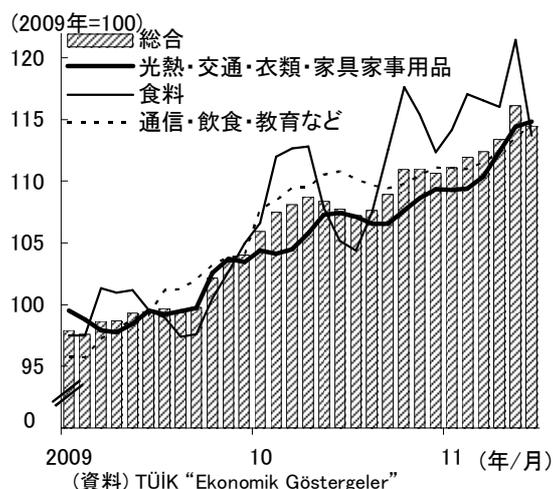
～ 内需が力強く、過熱による景気腰折れ懸念小 ～

- (1) トルコ経済は本年1～3月期、前年比11%の2桁成長（図表1）。昨年上半期の2桁成長はリーマン・ショックの影響によって大きく落ち込んだ2009年上半期の反動によって嵩上げ。昨年10～12月期の9.2%成長から、本年に入り、成長ペースがさらに加速。一部に過熱懸念。
- (2) まず物価が騰勢加速。消費者物価の前年比上昇率は、総合では5月の7.2%から6月6.2%に鈍化（図表2）。しかし、主因はフレッシュジュースを中心とする食品価格の下落。食品以外では幅広い分野で値上がりが拡大。もともと、4月以降、原油をはじめ一次産品価格の騰勢が鈍化するなか、光熱交通費関連では5月以降、上昇ペースが鈍化。
- (3) 加えて、経常収支の赤字幅拡大に依然歯止めが掛からず（図表3）。主因は原油をはじめとする資源価格の上昇に伴う輸入金額の増加。経常赤字の拡大を映じたトルコリラ安が輸入物価上昇に拍車。さらに本年に入り、対内証券投資が著増するなどホットマネー流入が加速。
- (4) 実体経済をみても3月の失業率が9.9%と10%を割り込む一方（図表4）、設備稼働率が既往最高水準に達するなど需給逼迫の兆し。しかし人口に占める労働力人口の比率、いわゆる労働力率は5割弱と依然低水準。加えて若年層中心の人口構成。労働力制約深刻化の懸念小。一方、直接投資を含め対内投資の活発化は設備投資を増やし産業活性化の原動力（図表3）。経済状況の一段の好転が6月総選挙で与党が歴史的な大勝を遂げた根因。今後、政治的安定とリーダーシップのもと、外資やインフラを含め投資のさらなる積極化が展望。腰折れ懸念小。

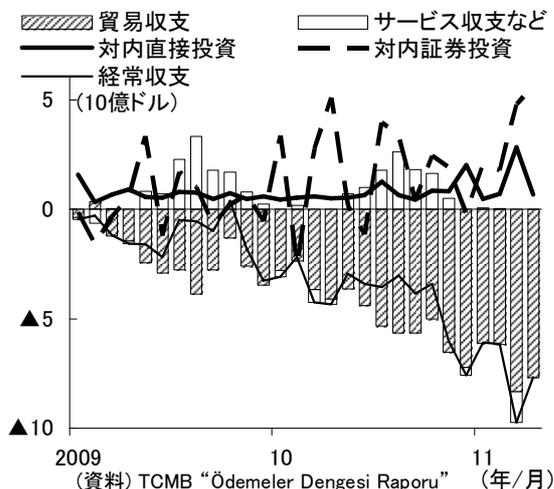
（図表1）トルコの実質経済成長率（前年比）



（図表2）トルコの消費者物価（前年比）



（図表3）トルコの経常収支と対内直接・証券投資



（図表4）トルコの名目賃金と失業率、雇用者数

